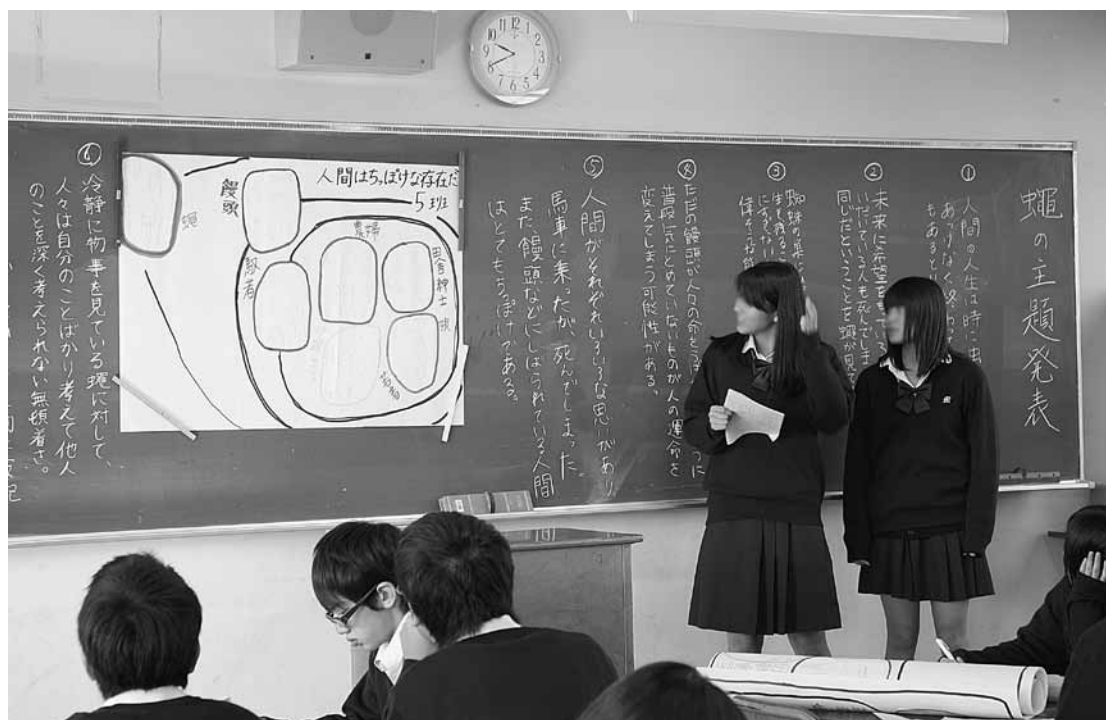


実践報告Ⅱ

《マッピングを活用して情景や心情を想像し、主題について考える。》

— 「比類・分類・構造化」 —

国語総合（小説／横山利一『蠅』）



高槻美保

	国語科学習指導案
	平成22年11月5日(金) 2校時 1年1組 指導者 高槻美保
単元名	小説
学習材	『蠅』 横光 利一 (『国語総合』東京書籍)
単元の目標	○登場人物の置かれた状況や心情について、進んで意見を述べ、理解しようとする。(関心・意欲・態度) ○叙述に即して読み取った内容から想像力を働かせ、登場人物の置かれた状況や心情を読み深め、主題をとらえることができる。(読む能力) ○『蠅』の持つ表現の特徴、文学史における位置付けについて理解することができる。(知識・理解)
指導上の立場	○生徒観 対象生徒は、国語の授業に対する意欲は持っていたが、自ら考えて読みを深めようとしたり表現したりすることが苦手な者もいた。そこで、授業に班活動を取り入れ、お互いに意見を出し合う場を設定した。また、詩歌を題材にして文章表現をさせ、想像力を伸ばす活動をさせた。その際、必要な語彙の不足を補うために、文学作品や日常会話などから、心情や五感を表す言葉を拾い出させ、それを活用させる指導も行ってきた。 現在も表現することに消極的な生徒がいるが、自ら考え、読みを深めようとする姿勢は見られるようになった。指導上の手だてによって、班活動を行い、互いに意見を出し合いながら表現することによって作品の読みをより深めることが期待できる。 ○題材(単元)観 『蠅』は、多様な虚構世界のおもしろさを味わうことができる教材である。巧みな場面の転換や時間の流れ、比喻表現や視覚的・聴覚的描写がさまざまなイメージを生み出している。主題を読み取るとともに、工夫された言葉による表現や、映画的表现手法を取り入れている点などにも着目させたい。 ○本単元で工夫する点や手だて 班活動を通して、様々な考えに触れるとともに、積極的に自分の意見を表現する機会を多く持たせたいと考えている。また、内容を把握しやすいように、ワークシートを使用して、本文の表現にも注目させたい。個人の読みから、班活動へのスムーズな移行、さらに全体での発表へと段階を踏みながら読みを深めることができるように配慮したい。 また、状況や心情を把握する際、相互に出した考えを視覚化するマインドマップの手法を取り入れることによって、考えた事柄を関連づけ、想像を広げる手がかりにさせたい。
指導計画	全6時間扱い 第1時 通読、作者・作品紹介、作品の設定確認 第2時 情景や心情の読み取り(班活動) ① 第3時 情景や心情の読み取り(班活動) ② 第4時 『蠅』全体の読み取り 第5時 主題の考察・主題発表についての準備(班活動) 第6時 各班の主題発表・まとめ 本時
評価	○具体的評価規準 ・登場人物の置かれた状況や心情について、進んで意見を述べ、理解しようとしているか。(関心・意欲・態度) ・叙述に即して読み取った内容から想像力を働かせ、登場人物の置かれた状況や心情を読み深め、主題をとらえることができているか。(読む能力) ・『蠅』の持つ表現の特徴、文学史における位置付けについて理解できているか。(知識・理解) ○Cと評価した生徒に対する手立ての例 ・必要に応じて、心情や五感を表すプリントを参考にしたり、他者の意見を聞いたりしながら、内容を読み深めるよう助言したりする。

本時案 (第6時)			
目 標	発表内容を聞き取りながら、進んで他の班の読みを理解しようとする。(関心・意欲・態度) 発表内容を比較し、『蠅』の主題について考えを広げ読みを深める。(読む能力)		
時間	学習活動	指導・支援上の配慮事項など	評価規準・方法など
導入 5分	本時の活動内容について知る。 発表準備をする。	予め班活動の形態にさせておく。 4人構成10班 代表者に主題を黒板に書かせておく。 本時の目標を説明する。 発表者に発表原稿・構成図(主題に沿って着目した点を示したもの)の確認・準備をさせる。	発表内容に関心を持って聞き、積極的にポイントや疑問点をワークシートに記入をしようとしているか。(関心・意欲・態度) Cの生徒への指導の手立て ワークシートを提出させ、記述内容を点検することで評価する。(読む能力) 聞き取りができていない生徒には、説明の内容からキーワードと考えられる語をとらえて記入するように促す。
展開 30分	班ごとに発表する。 発表を聞く。	各班の発表者に主題と説明を発表させる。 各班の主題や説明を聞きながら、必要な箇所はワークシートに記入させる。 ＊主題の説明 ＊自分の班との相違点 ＊質問事項 ＊内容の評価 等	
8分	主題について確認する。 『蠅』の主題について自分の考えや感想を書く。	各班が発表した主題が前時までの学習内容から考えられる範囲内であればよいが、部分的な読みにとどまっている班については、補足を行う。 班の発表内容を聞いて多様な読みにふれ、各自で『蠅』の主題について考えや感想をまとめ提出させる。(時間によっては課題とする。)	
まとめ 2分	発表原稿等を提出する。 次時の予告を聞く。	ワークシートの提出について指導する。	
			Cの生徒への指導の手立て ワークシートの右側に記入した内容に着目するよう助言する。

実践Ⅱ

考察

①成果

文章に即して、情景や人物の心情を想像した上で主題を捉えさせるとともに、小説を読む楽しさを感じさせたい、ということを念頭においた実践である。

- (1) 班活動において以下のような改善を試みた。
 - ・前回の反省をもとに班を4人構成とし、机の配置を凸型にした。
 - ・役割分担と取り組み状況を相互評価させることで、少しずつ積極的な活動へとつながっていった。
 - ・班での意見交換を通して自分では気づかなかった読みを知り、あらためて小説を読むおもしろさを感じた生徒も多くいることが、授業後の感想からうかがえた。
- (2) ワークシートには、以下のような工夫を加えた。
 - ・「個人の考え」から「班」「全体の考え」へと、段階を追って学習内容が確認できるように、レイアウトを工夫した。
 - ・班になると指示が徹底しにくくなる点を考慮し、ワークシートにも指示を簡潔に記した。
 - ・〈想像＝自由な発想〉となって本文から逸脱してしまわないように、ワークシートに本文も載せた。
 - ・根拠を視覚的に把握させるために、どの言葉に基づいた「想像」か一目でわかるように本文中の語句を記入させた。
- (3) マッピングの手法を取り入れることで、以下のような成果を得た。
 - ・生徒が、情景や人物の心情を図式化することで、それらを効果的にとらえることができた。
 - ・活動が停滞している生徒も、書き込みを継続するうちに想像がより広がっていった。
 - ・生徒が文章構成を紙の上で構造化することで、様々な視点に立って想像できるようになった。
 - ・登場人物ごとに作成したマップそのものを、相互に関連づけながら模造紙に貼って分類することで、思考が整理され、作品の主題に深く迫れるようになった。

② 課題

情景を想像することが比較的しやすい作品であるが、それを言葉にして表現させたときに、生徒の語彙が不足しているように感じた。個人の力不足を班で補い合っていたが、より豊かな表現につなげるために、語彙力不足を補う指導をさらに継続・発展させていくことが必要である。

マッピングをより効果的に活用するためには、マップを作成する目的が「思考の広がり」を促すためなのか、「相互の関係づけ」をはっきりさせるためなのかを生徒に明確に示す必要があった。

また、班の発表を相互評価させたが、その際使用した評価表や評価方法について改善すべきところが散見された。限られた時間の中での学習活動なので、目的に即した「評価の観点」を明確にする必要がある。

さらに、発表後のまとめを教師が行ったが、生徒自身に比較検討させるほうが、読みを深めることにつながったのではないかと感じた。また、授業の中で提示された複数の読みを個人の読みにフィードバックさせ、より深くより主体的に内容を捉えさせていく指導も重要である。

現代文 次の授業までの宿題

1, このプリントの意味調べをして提出。

2, 色ペン（色鉛筆）を七色用意してくる。（左の色がなければ他の色でもOK）

（馭者は青 農婦は赤 若者は緑 娘はピンク 母親と男の子は黄色 田舎紳士は紫色、蠅用にオレンジ色）

意味調べ

読み方

意味

空虚（	（	（
陽炎（	（	（
画策（	（	（
潔癖（	（	（
饒舌（	（	（
知己（	（	（
放埒（	（	（
首をもたげる	（	（
手をつける	（	（

『蠅』（教科書P86）
プリントその一
☆物語の設定
季節時代
時刻
場所
場面

横光利一（便覧P199）

一年（ ）組（ ）番 氏名（ ）

☆登場人物

☆読後の感想

場面
宿場

宿場

宿場
(場庭)

野末の
路上

宿場
(場庭)

一
真夏の宿場は空虚であつた。ただ眼の大きな一匹の蠅だけは、薄暗い蔵の隅の蜘蛛の巣にひつかかると、後肢で網を跳つつしぱらくぶらぶらと揺れていた。と、豆のようにぼたりと落ちた。そうして、馬糞の重みに斜めに突き立っている糞の端から、裸体にされた馬の背中まで這い上がった。

二
馬は一条の枯れ草を奥歯にひっつけたまま、猫背の老いた馱者の姿を捜している。馱者は宿場の横の饅頭屋の店頭で、将棋を三番として負け通した。
「なに？ 文句を言うな。もう一番じゃ。」
すると 廂をはずれた日の光は、彼の腰から、円い荷物のような猫背の上へ乗りかかつてきた。

三
宿場の空虚な場庭へ一人の農婦が馳けつけた。彼女はこの朝早く、街につとめている息子から危篤の電報を受けとつた。それから露に通つた三里の山路を馳け続けた。
「馬車はまだかのう？」
彼女は馱者部屋を覗いて呼んだが返事がない。
「馬車はまだかのう？」
歪んだ畳の上には湯飲みが一つ転がついて、中から酒色の番茶がひとり静かに流れていた。農婦はうろうろと場庭を回ると、饅頭屋の横からまた呼んだ。
「馬車はまだかのう？」
「先刻出ましたぞ。」
答えたのはその家の主婦である。
「出たかのう。馬車はもう出ましたかのう。いつ出ましたな。もうちと早よ来るとよかつたのにやが、もう出ぬじやるか？」
農婦は性急な泣き声でそう言ううちに、はや泣きだした。が、涙も拭かず、往還の中央に突き立っていつから、街の方へすたすたと歩き始めた。
「二番が出るぞ。」
猫背の馱者は将棋盤を見つめたまま農婦に言った。農婦は歩みを停めると、くろりと向き返つてその狭い眉毛を吊り上げた。
「出るかの。すぐ出るかの。件が死にかけておるじやが、間に合わせておくれかの？」
「桂馬と来たな。」
「まあまあ嬉しや。街までとれほどかかるじやろ。いつ出しておくれるらう。」
「二番が出るわい。」と馱者はほんと歩を打つた。
「出ますかな、街までは三時間もかかりますかな。三時間はたへふりかりますやろ。件が死にかけていますのじや、間に合わせておくれかうぞ？」

四
野末の陽炎の中から、種蓮華を叩く音が聞こえてくる。若者と娘は宿場の方へ急いで行つた。娘は若者の肩の荷物へ手をかけた。
「持とこ。」
「なにに？」
「重たからうが。」
若者は黙つていかにも軽そうな答子を見せた。が、額から流れる汗は極辛かつた。
「馬車はもう出たかしら。」と娘は呟いた。
若者は荷物の下から、眼を細めて太陽を眺めると、
「ちよつと暑うなつたな、まだじやろ。」
二人は黙つてしまった。牛の鳴き声をした。
「知れたらどうしよう。」と娘は言ううちよつと泣きそうな顔をした。
種蓮華を叩く音だけが、幽かに足音のように追つてくる。娘は後ろを向いて見て、それから若者の肩の荷物にまた手をかけた。
「私が持とう。もう肩がなおつたえ。」
若者はやはり黙つてどしどしと歩き続けた。が、突然、「知れたらまた逃げるだけじゃ。」と呟いた。

五
宿場の場庭へ、母親に手を曳かれた男の子が指をくわえて入つてきた。
「お母さん、馬々。」
「あめ、馬々。」男の子は母親から手を振り切ると、蔵の方へ馳けてきた。そうして二間ほど離れた場庭の中から馬を見ながら、「こりやッ、こりやッ。」と叫んで片足で地を打つた。馬は首をもち上げて耳を立てた。男の子は馬の真似をして首を上げたが、耳が動かなかつた。で、ただやたらに馬の前で顔をしかめると、再び「こりやッ、こりやッ。」と叫んで地を打つた。
馬は槽の手邊に口をひっつけながら、またその中へ顔を隠して馬草を食つた。
「お母さん、馬々。」
「あめ、馬々。」

蠅

馱者

農婦

馱者

？ 「桂馬と来たな。」には、馱者のどのような気持ちも

が表れているか。

若者

娘

？ なぜ「娘は後ろを向いて見」たのか。

母親

男の子

宿場
(場庭)

？ この場面は何時頃になっているか。()

語り手
説明

宿場

宿場
出発

崖

六

「おっと、待てよ。これは鞍の下駄を置くのを忘れたぞ。あいへは西瓜が好きじゃ。西瓜を置ると、俺もあいづも好きじゃで面得じや。」

田舎紳士は宿場へ着いた。彼は四十三になる。四十三年貧困と戦い続けたかいあつて、昨夜ようやく奉還の仲買で八百田を手に入れた。今夜の晩は未来の富貴のために詰まつている。けれども昨夜銭湯へ行つたとき、八百田の札束を鞆に入れて、洗い場まで持つて入つて笑われた記憶については忘れていた。

農婦は場庭の床几から立ち上がる、彼の傍へ寄つてきた。

「馬車はいつ出るのござんしょうな。倅が死にかかつていますので、早よ街へ行かんと死に目にあえまい思ひましてな。」

「そりゃいかん。」

「もう出るのござんしょうな、もう出るつて、さつき言わしやつたがの。」

「さつて、何しておるやうな。」

若者と娘は場庭の中へ入つてきた。農婦はまだ二人の傍へ近寄つた。

「馬車に乗りなさるのかな。馬車は出ませんぞな。」

「出ませんか？」と若者は訊き返した。

「出ませんか？」と娘は言つた。

「もう二時間も待つていますのやが、出ませんぞな。街まで三時間かかりますやろ。もう何時になつていますかな。街へ着くと正午になりますやうか。」

「そりや正午や。」と田舎紳士は横から言つた。農婦はくるりと彼の方をまた向いて、

「正午になりますかいな。それまでにや死にますやうな。正午になりますかいな。」

と言ううちにまた泣きだした。が、すぐ饅頭屋の店頭へ馳けていった。

「まだかろう。馬車はまだなかなか出ぬじやろか？」

猫背の駁者は将掛鞍を枕にして仰向きになつたまま、實の子を洗っている饅頭屋の主婦の方へ頭を向けた。

「饅頭はまだ蒸さんかいのう？」

七

馬車は何時になつたら出るのであらう。宿場に乗つた人々の汗は乾いた。しかし、馬車は何時になつたら出るのであらう。これは誰も知らない。だが、もし知りうるこののできるものがあつたとすれば、それは饅頭屋のかまどの中で、ようやく眠れ始めた饅頭であつた。なぜかと言えば、この宿場の猫背の駁者は、まだその日、誰も手をつけない蒸し立ての饅頭に初手をつけるということが、それほどどの潔癖から長い年月の間、独身で暮らさねばならなかつたという彼のその日の目の、最高の慰めとなつていたのであつたから。

八

宿場の柱時計が十時を打つた。饅頭屋のかまどは湯気を立てて鳴りだした。ザク、ザク、ザク。猫背の駁者は馬車を切つた。馬は猫背の横へ、水を充分飲み溜めた。ザク、ザク、ザク。

九

馬は馬車の車体に結ばれた。農婦は真つ先に車体の中へ乗り込むと街の方を見続けた。

「乗つとくれやア。」と猫背は言つた。

五人の乗客は、傾く狭い路に又をつけて農婦の傍へ乗り始めた。

猫背の駁者は、饅頭屋の實の子の上で、綿のように眠らんでいる饅頭を腹掛けの中へ押し込むと駁者台の上にその背を曲げた。喇叭が鳴つた。鞭が鳴つた。

眼の大きなかの一匹の蠅は馬の腰の余肉の匂いの中から飛び立つた。そうして、車体の屋根の上にとまり直ると、今さきに、ようやく蜘蛛の網からその生命を取り戻した身体を休めて、馬車といつしよに揺れていった。

馬車は炎天の下を走り通した。そうして並木をぬけ、長く続いた小豆畑の横を通り、亜麻畑と桑畑の間を揺れつつ森の中へ割り込むと、緑色の森は、ようやく溜まつた馬の額の汗に映つて逆さまに揺らめいた。

十

馬車の中では、田舎紳士の饅頭が、早くも人々を五年以来の知己にした。しかし、男の子はひとり車体の柱を握つて、その生き生きした眼で野の中を見続けた。

「お母、梨々。」

「ああ、梨々。」

駁者台では鞭が動き停まつた。農婦は田舎紳士の裾の鎖に眼をつけた。

「もう幾時ですかいな。十二時は過ぎましたかいな。街へ着くと正午過ぎになりますやろな。」

駁者台では喇叭が鳴らなくなつた。そうして、腹掛けの饅頭を、今やことごとく單の鞍の中へ落として込んでしまつた駁者は、いつそう猫背を張らせて居眠りだした。その居眠りは、馬車の上から、かの眼の大きな蠅が押し懸つた数段の梨畑を眺め、真夏の太陽の光を受けて真つ赤に映えた赤土の断崖を仰ぎ、突然に現れた激流を見下ろして、そうして、馬車が高い崖路の高低でかたかたときみだす音を聞いてもまだ続いた。しかし、乗客の中で、その駁者の居眠りを知つていた者は、わずかにただ蠅一匹であるらしかつた。蠅は車体の屋根の上から、駁者の垂れ下がつた半日の頭に飛び降り、それから、濡れた馬の背中にとまつて汗を舐めた。

馬車は崖の頂上へさしかつた。馬は前方に現れた眠屋の中の路に従つて柔順に曲がり始めた。しかし、そのとき、彼は自分の脚と、車体の幅とを考へることはできなかつた。一つの車輪が路から外れた。突然、馬は車体に引かれて突き立つた。瞬間、蠅は飛び上がった。と、車体といつしよに崖の下へ墜落していく放埒な馬の腹が眼についた。そうして、人馬の悲鳴が高く一声発せられると、河原の上では、押し重なつた人と馬と板片との塊が、沈黙したまま動かなくなつた。が、眼の大きな蠅は、今や完全に休まつたその羽根に力を續めて、ただひとり、悠々と青空の中を飛んでいった。

田舎紳士

農婦

？ 「農婦はまた二人の傍へ近寄つた。」とあるが、なぜ、農婦はいろいろな人に話しかけるのか。

若者と娘

駁者

駁者

駁者

農婦

駁者

蠅

田舎紳士

母親と男の子

農婦

駁者

蠅

人々

蠅

☆場面 一 蠅

--

☆登場人物のまとめ

駈者	農婦	若者と娘	母親と男の子	田舎紳士

饅頭

--

☆馬車に乗っている時の気持ちを想像してみよう。

駈者	農婦	若者と娘	母親と男の子	田舎紳士	蠅

☆場面 十 蠅

--

人々

--

☆蠅の役割

--

☆饅頭の役割

--

☆感想



☆手順

- ① 主題を五十字程度でまとめる
- ② 主題の説明
 - ・どのように考えて、この主題にしたのか
(作品で着目したところ)
(疑問を持ったところ)
(考察したこと) など
- ③ 構成図の説明
 - ・どうして下のように配置したか
 - ・配置するときに工夫したところ

☆トトハエトシノ図鑑図

[illegible]

☆主題

[illegible]

☆各班が考えた作品の主題

主題として適当 A 主題として不適当 B				
	主 題	説明・相違点など	質 問	評 価
一 班				A ・ B
二 班				A ・ B
三 班				A ・ B
四 班				A ・ B
五 班				A ・ B
六 班				A ・ B
七 班				A ・ B
八 班				A ・ B
九 班				A ・ B
十 班				A ・ B

各班の発表を聞いて（発表を比較して気づいたこと、主題についてさらに考えたことなど）

田舎紳士

息子に
貧乏に
米粟を
嫌な
それ

かん
農婦

なせ、
いづ馬
人て
たか
若者と娘

主婦の	駁者	残
早く	自分に	

馬車は
きるも
だな
饅頭に
らなか
駈者
毎日
それ
しす
から

めた
馭者
い
らな

へ押し	農婦
用者	一刻

田舎紳士

おじい	母親と男	農婦	時向
-----	------	----	----

の麻の
りは、
受けて
が高い
その割
根の上
汗を
蠅
敷者
おた
年め

人々 助けて 居眠り

た。た。を捕
勇の子
幼い
馬を見て喜んでいる

馬車は屋根の頂上へさしかかつた。馬は前方に現れた眼差しの中の路に従つて、未頼に曲り出した。しかし、そのとき、彼は自分の胸と、車体の幅とを考へるとはできなかった。一つの車輪が路から外れた。突然、馬は車体に引かれて突き出した。瞬間、彼は飛び上つた。一瞬、車体といつては柱の下へ墜落して行く放埒の馬の腹が眼についた。そしてついで、又馬の腹が又「一声響かされた」。大原の上には、正し重つた人と馬の腹片との境が、正確なまがさ動かなくはれた。が、眼の大きな網は、今も、まだつた人と馬の腹片との境が、正確なまがさ動かなくはれた。

☆各班が考えた作品の主題

*主題として 適当A・不適当B

	主題(標題)	説明・相違点など	質問	評価
一班	蜂から見た人間のあつけなさ	確かに人間の方が虫よりあつけないかもしれないと思った。		A B
二班	蜂が見届けた悲劇	「死んだら全て同じ」ということが自分にはない考えだ。ほろぼれと思った。		A B
三班	人間のおごりに対する否定	自分の班		A・B
四班	運命を変えた饅頭	饅頭が人々の運命を変えたという考えが似ていた。		A B
五班	人間はちっぽけな存在だ	饅頭についての説明が詳しくあつた。この主題に饅頭のことをいれたいと思つた。		A・B
六班	他人のことを考えられない人間のおろかさ	登場人物が自分からかわるのかと思つた。		A・B B
七班	饅頭(物)に支配される人々	↑ 確かにそう考える物に支配されまくると思つた。		A B
八班	人間の小さくはない命	すごい命やりやすかつた。		A B
九班	人間と蜂の対比	対比することによって人間の小さく弱さのあらわなものが分かつた。		A B
十班	蜂と人間の立場の逆転	「逆転」という考えは自分にはよくいいなと思つた。		A B

☆各班の意見交換(各自の評価も参考にしながら、主題として一番適当と考えた班はどこか、その理由を含めて話し合う。)

(8)班 この班は人間のことをあまり悪く言っていない。他の班は人間を悪く言っているイメージを持っていた。

☆発表を聞いて(気づいたこと、最終的に自分が考えた主題、その主題に対する自分の意見や感想などを書く。)

最初は蜂から見た人間という物語かと思つたが、蜂の立場から話しているうちに、人間のことについて話している物語だと思つた。主題を提案したのは私はいいけれど、この主題について私は蜂の立場から考えた。人間を客観的にみている人間は偉く、弱さを見つけない。人間について考えていた。確かに人間は偉く、人間は自分達の中に物事が動いている感じがした。人間は人間が物に支配されているという意見は自分には思いつかなかった。蜂の立場から人間を悪く言っているという意見は自分には思いつかなかった。

中提出

